



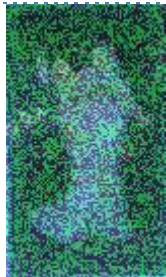
## 夏目漱石の美術世界展 東京藝術大学

大学美術館 2013年5月14日～7月7日 5/22記

夏目漱石(1867.2.9～1916.12.9)の文筆作品には実に多くの画家の名前が登場し、蘊蓄が傾けられる。アンドレア・デル・サルト、ターナー、J.E.ミレー、酒井抱一、青木繁...等々。漱石はロンドン留学中にも日本でも多くの画を鑑賞し、自身も絵を描いた。

本展は、漱石小説装幀画の橋口五葉、漱石山房を描いた岡本一平の作品から始まり、漱石の文章に照らした西洋画～日本画、触発彫刻が展示されている。可笑しいのはさすが藝大お手の物。『虞美人草』ラスト・シーンに登場する酒井抱一が描いたとされる屏風を、藝大日本画の准教授に文章から興して描かせてしまったこと。本展用本年作の出来立てほやほや。

長編はもとより『倫敦塔』『夢十夜』『薙露行』『文学評論』に登場する絵画の他、漱石の自筆原稿が展示されている。ウオーターハウス、ロセッティ、J.E.ミレーの並列展示が印象的だった。借用(展示)期間のバラつきは痛い、集められるだけ集めたようだ。



漱石作品によく登場する「鏡」の意味は「鏡を通してしか世界を見ることを許されない女が、鏡の中の円卓の騎士ランスロットを見て心を揺らし、その姿を追って現実世界を見る」というテニスン作品を描いたウオーターハウスの『シャロットの女』に見て取れる。